

事故防止に向けた安全対策 【 サッカー 】

1 競技特性

(1) 競技の特性や特徴

サッカーは、1チーム11人の2チームが手や腕以外（ゴールキーパーは除く）の足などを使い、一定時間内でゴール数を競う競技である。ボール奪取からのすばやい切替による攻撃やフリーキック、コーナーキックなどのセットプレーからの攻撃のための技術・戦術、逆にそれらをさせないように防御する技術・戦術が求められている。サッカーをするにあたっての必要な体力要素は多岐にわたり、競技中はダッシュやストップ、方向転換、ジャンプなどの動作を相手と競いながら行うため、全身持久力、瞬発力（スピード）、俊敏性（アジリティー）、筋力、バランス能力などが求められる。

(2) 競技特性に応じた事故の特徴

ボールを奪い合う場面において、激しいボディコンタクトが頻繁に起こりバランスを崩して転倒することがある。その際に、足関節の捻挫や手指の骨折が多く発生する。成長とともに身体のバランスが図られることで徐々に転倒がすくなくなるものの競技レベルが高くなるにつれて運動量、瞬発力、俊敏性がより求められるようになるため、下肢への受傷が多くなる。また、サッカーは例外を除いて屋外で行われる競技のため、天候、気温、湿度等の影響を受けやすく、熱中症のリスクや落雷による事故に注意が必要である。

(3) 過去の重大事故例等

- ・ サッカーゴールの設置不備による転倒死亡事故
- ・ 落雷事故
- ・ 熱中症による死亡事故
- ・ 選手同士の交錯による事故（失明、脳震盪）

2 想定される事故事例と予防策

(1) 主として【施設・設備・用具】が要因となって起こる事故

想定される事故やけがの原因（事例）	傷害例	予防策
<ul style="list-style-type: none">・フィールド内（ウォーミングアップ会場含む）の整備不良（特にクレーコート）による事故	捻挫、裂傷、擦過傷	<ul style="list-style-type: none">・整地し、できるだけ平らな状態にする。・大きな石やガラスの破片等の危険物を除去する。・場合によっては水を撒くなどして、地面を安定させる。
<ul style="list-style-type: none">・フィールド外（チームベンチや本部席等）の設置不備による事故	捻挫、打撲、裂傷	<ul style="list-style-type: none">・チームベンチ、本部席等（テント等含む）をフィールドから安全な距離を離して設置する。

・ゴールの不良と設置不備による事故	死亡、骨折、打撲、裂傷	・ゴールの破損箇所や溶接部の強度を確認する。 ・移動式ゴールは倒れないよう杭で固定する。 ・クロスバーにぶら下がる等の行為をさせない。 ・ゴールネットが正しく設置されているか確認する。
・ボールの破損による事故	擦過傷	・ボールに破損がないか確認する。
・コーナーフラッグポストの不備による事故	裂傷、擦過傷	・ポスト部分に亀裂がないか確認する。 ・コーナーフラッグポストが正しく設置されているか確認する。
・不適切な服装による	骨折、打撲、裂傷、擦過傷	・ネックレスなどの装身具を装着させない。 ・ゴールキーパーは露出部分を少なくする。 ・スパイクのポイントをチェックし、危険がないか確認する。
・他競技の人との衝突による事故	打撲、裂傷	・他競技(野球、陸上競技等)とのエリア区分の取り決めをし、共通認識をもっておく。
・他競技のボールや用具による事故	死亡、打撲、裂傷	・ボール等が他競技エリアに入りそうな場合、大きな声で注意を促す。

(2) 主として【活動内容】が要因となって起こる事故

想定される事故やけがの原因（事例）	傷害例	予防策
・ウォーミングアップ不足による事故 ・身体接触（タックル、チャージ含む）による事故	肉離れ、筋断裂 頸椎損傷、骨折、筋断裂、捻挫、打撲、擦過傷	・気温や天候状況に応じて、ウォーミングアップ時間や内容を工夫して行う。 ・転倒した際の手の付き方や身のこなし方など習得させるとともに、手首、肘、肩関節の柔軟性を日頃より高めておく。 ・フェアプレー精神を遵守させ、危険なタックルや相手を傷つけるような行為をさせない。 ・レガースを着用させる。
・ヘディングの競り合いでの事故 ・キック、ストップダッシュ、切り返しの動作の際に起こる事故	脳震盪、頭部挫傷、鼻骨/眼窩底骨折、歯牙破折 脱臼、口内裂傷 股関節痛、筋断裂、捻挫	・正しい競り合いの技術を身につけさせるとともに、ルールを遵守させる。 ・練習ではお互いに声をかけさせる。 ・日頃からのストレッチ習慣により、股関節・膝関節・足関節等の柔軟性を高めておく。 ・各関節可動域をチェックする。
・膝への過度な負担による事故	・半月板損傷、前十字靭帯断裂/損傷	・ウォーミング、トレーニング後のケアをしっかり行う。 ・膝関節の不安定性や、膝蓋骨のゆがみ等を確認する。

(3) 主として【環境条件等】が要因となって起こる事故

想定される事故やけがの原因（事例）	傷害例	予防策
・高温多湿の環境下や長時間にわたる練習による熱中症	熱失神、熱疲労、熱けいれん、熱射病	・WBGT 計を設置し、数値を確認するとともに JFA の指針に従い対応する。 ・環境状況に応じた運動、休憩、水分補給等の計画を立てる。
・寒さによる事故	筋損傷、低体温症	・防寒具の着用により、身体の保温に努める。 ・ウォーミングアップの時間・内容を工夫する。 ・活動終了後に、できる限り温かい場所で更衣できるようにするとともに、温かい飲み物を準備する。
・落雷による事故	死亡、心肺停止、熱傷	・気象庁提供情報「雷注意報」や「雷ナウキャスト」等で情報収集を行う。 ・事前に危険が予測される場合、日程や時間の調整をする等の対策を行う。 ・目視や音により、積乱雲の動きや急な冷たい、雷光・雷鳴が確認できた際には、すぐに中断して安全な場所へ避難する。 ・JFA から出されている「サッカー活動中における落雷事故防止対策について」を参考に行動する。
・豪雨・突風等による事故	・死亡、骨折、打撲	・気象庁情報提供の警報や注意報等により情報収集をこまめに行う。 ・ゴール、テントの確実な固定と状況に応じてテントの撤収を判断する。
・J アラート発令時の対応		・発令時の対応や避難方法について事前に確認し、参加者等へ周知しておく。また、関係者及び保護者等との連絡方法について準備しておく。